■月刊「OISCA」10月号付録■通巻669号■令和元年10月1日印刷■令和元年10月5日発行

よみがえれ！ 海岸林

東日本大震災復興支援「海岸林再生プロジェクト10ヵ年計画」を、
元日経新聞論説委員の小林省太がさまざまな角度でお伝えします。

Vol.8

話をプロジェクトに戻そう。震災2ヵ月半後の2011年5月下旬に宮城県名取市を訪れてから、オイスカは候補を名取に絞って準備を進めた。地元住民との話し合い、林野庁や宮城県との折衝、支援者探し。「三方面作戦」を通じ、秋にかけて「国民運動型」を目指すプロジェクトがしだいに姿を現してくる。

震災半年後の名取市の海岸。残ったマツが枯れ始め、がれきの山にはパワーショベルが何十台と取りついていた（2011年9月5日）

ヨーロッパの国民性の違いを「イギリス人は歩きながら考える。フランス人は考えた後で走りだす。スペイン人は走った後で考える」とたとえることがある。日本では「日本人は走っている人の後にくっついて走る」と付け加えるのがミソだが、プロジェクトに臨むオイスカは、日本人とはほど遠い、風車に突っ込むドン・キホーテとまでは言わないが、スペイン人気質を思わせるものだった。

「5時から男」がへろへろになった

「津波で流された海岸の松林を再生する手伝いをしたい」という話を、私がオイスカの吉田俊通・現海岸林担当部長らからはじめて聞いたのは4月22日だった。その時点では「どこで？」も含め大事なことは何も決まっていない。プロジェクトは海のものとも山のものともつかなかった。ただ、一つだけ確定していることがあった。震災4ヵ月後の7月11日月曜日に東京で開くシンポジウムである。プロジェクトは漠としたまま、しかし走りだしていた。

4月4日に皆川芳嗣林野庁長官に会った時、オイスカの側が9月ごろシンポをしたいと言うと、「もっと早く、7月ごろがいい」とアドバイスを受けた。政府の海岸林再生に関する検討会が中間報告を出す時期に合わせて、という趣旨だったようだが、すぐに動き出すのがオイスカ流である。会場探し、テーマの選定と登壇者の確保、参加者や後援・協賛団体集め、広報・宣伝…。準備期間は3ヵ月。当時、オイスカ内の海岸林担当は事実上吉田さん一人、自称「5時から男」が作業の大波に飲み込まれた。

突貫仕事が間に合わず、三日前の金曜日からほとんど徹夜した。週末、親しい職員二人が自分の仕事もこなしながら資料作りや印刷を手伝った。「こっちがへろへろで目が血走っていたからでしょうね。あの二人がいなければ潰れていた」と吉田さんは振り返る。

幸い、「どこで？」は名取に絞り込まれていた。「東北にもう一度、白砂青松を取り戻したい」と題して千駄ヶ谷の津田ホールで開かれたシンポには、350人が集まった。オイスカ職員もこの日はほぼ総出で会場の仕事を分担、「プロジェクトは吉田任せ」の組織が一体感を強めた。

オイスカ本部の名取市民。宮城県産の日本酒「一ノ蔵」がみえる（2011年7月11日）

2011年7月11日のシンポには350人が集まった

壇上には皆川林野庁長官、政府の検討会の太田猛彦座長（東京大学名誉教授）、名取市東部震災復興の会の鈴木英二会長（現名取市海岸林再生の会会長）、宮城県中央森林組合の佐々木勝義・森林活用課長（現松島森林総合代表）らが並んだ。行政、学界、地元、林業関係、2004年のインドネシア・スマトラ沖大地震の復興に携わったオイスカのデビ・ワハユニ・プロジェクト担当も含め、顔ぶれに苦心がうかがえた。

『国民運動型』というのはオイスカでも一世代上の言葉で、我々が好んで使うわけではないが、『市民参加』と同じく、やりたいのは自分たちだけではない、というメッセージになる。『市民』より『国民』がいいか、という話を林野庁の知人とも話して、プロジェクトの理念に使うようにしました」と吉田さんは説明する。

私の解釈では、「国民運動型」とはなるべく広い層を巻き込むという趣旨で、国民の側からみれば①知る②関心を持つ③参加する、の三段階がある。そのとっかかりとして、シンポの登壇者には海外も視野に入れた「国民運動」を目指す姿勢が見られるように思う。

シンポには名取の市民約40人が大型バスで招かれた。シンポを聴き、杉並区のオイスカ本部3階の和室に宿泊、コンビニで買った総菜をさかなに飲み、雑魚寝した。震災後ちょうど4ヵ月、「海岸林どうのこうのというより、みんなでバス旅行することで絆がほしかったんだね」と参加者は話している。

シンポにはもう一つ、目的があった。少々荒っぽい吉田流の表現を借りれば「投網をかける」。国民運動の基礎になる名簿集めである。特に、寄付を集めるために欠かせない企業のリストがほしかった。

当時、震災復興をどう支援するかは企業にとっても大きなテーマで、シンポにはCSR（企業の社会的責任）部門の担当者を中心に約70社が参加した。このうち何社かは、寄付や社員ボランティアを通じてプロジェクトを担っていくことになる。

企業の復興支援のシンボルに

参加者にカード会社、三菱UFJニコスの佐々木宗平会長の姿があった。震災三週間後の4月1日付で社長から転じて「震災復興支援」を担当、2007年に合併で誕生したばかりの同社の企業文化を育む意味でも復興支援に力を入れる考えを社員に表明していた。どんな支援が可能か、担当者はインターネットで手当たり次第情報を集めた。試行錯誤の結果、オイスカの働きかけもあってこのプロジェクトを柱の一つに据えることになる。同社はかねてオイスカの海外事業に寄付を続けていたが、長期的な復興支援のシンボルとして海岸林再生を重点的に応援する方向に舵を切ることを、6月の経営会議で決めた。

担当者がつくった資料にプロジェクトは「現在計画中」とあったという。いわば先物買い。プロジェクトへの寄付も企業の一番乗りで、オイスカを大いに勇気づけた。「支援は細く長くを大切に」と佐々木会長はよく言い、その後業績の浮き沈みはあっても寄付が途絶えることはない。同社の佐藤俊二執行役員は「一番バッターとして寄付の累計では他社に負けたくない気持ちもある。社内には『法人税も払えないほど業績が大変な時期に寄付を続けるのか』という疑問もあったが、社会と当社の関わりのシンボルとしてやるべきことだということを、

歴代の経営トップも理解している」と話している。

おさらいすると、このプロジェクトの肝は、苗木生産から担うこと、そして補助金など公的なお金に頼らず必要な資金は寄付で集めること、である。シンポの休憩時間に皆川林野庁長官と太田東大名誉教授が「苗木に目をつけたのはすごい」と立ち話していたのを職員が小耳に挟んだ。「してやったり」である。

補助金に頼らないと決めたのは、監査にかかわる煩瑣な手間を避け用途を縛られない資金を得るため、ということだが、「お金集めはこのシンポで勝負あったと思った」。これも乱暴で楽観的な言い方ではあるが、吉田さんの本音か。いち早く名乗りを上げ、いち早く動いた、まず走りだしたことで企業も集まったのである。

このころの名取での活動は、宮城県との折衝および地元の人たちに納得してもらうことが中心である。5月から8月にかけての県との話し合いでは、苗木を生産したいというオイスカの本気度が試された。

三菱UFJニコスの佐々木会長（右から2人目）はプロジェクト事務所のお披露目にも参加した。右端は全日本空輸の篠辺修副社長（名取市、2012年4月26日）

そもそもオイスカを知る職員さえほとんどいないところからの出発だった。

県森林整備課が6月13日付でオイスカに質問を出している。いくつかの条件から「被災された農業者の方の収入確保を目的とした（苗木生産業への）新規参入は、難しい面があるとも思われる」としたうえで、生産規模や広範な塩害がある土地での苗畑の確保などに関して質問を並べ、「貴財団で考えている当該事業のスキーム（ポンチ絵等）の提供をお願いしたい」と結んだ。このメールは、プロジェクトに否定的なだけでなく、「上から目線」を感じる。「ポンチ絵（イラストや図を使った企画書などを指す官庁用語）」といった一般の人になじみのない言葉にも、そうした姿勢は見てとれる。

7月、8月。それが変わっていった。県によれば、先走らずに行政の計画に沿って長期的にプロジェクトを進める姿勢、主役は地元でオイスカは後方支援というぶれない説明が理解されていくのである。「新規参入は困る」と言っていた県内の種苗業者の納得も得て、県は8月、クロマツの種苗を取り扱う資格を得るための講習会をオイスカ向けに11月に開くことを決める。県が出した事実上のゴーサインである。

いいことなんだろ。俺はやるよ

一方、「ツーカーになるには3年かかる」と覚悟を決めていた地元の人々との関係に「ゴーサイン」が出たのは9月30日だ。

この日夕、名取にいた吉田さんは森清さんに「吉田君、ちょっと来い」と声をかけられた。森さんは何度もこの欄に登場した北釜集落の被災農家の人である。「またつるしあげですかあ」、冗談半分そう言いながらチームの面々と連れられて行った先は煙もうもう。これまでと様子が違う。海辺の北釜だけでなく、もう少し内陸のいくつかの地区の人も集まり、ホルモン焼きの宴会が始まっていた。

「俺たち、お前ら認めるから」と乾杯の音頭。「疑って悪かった」という言葉。なお緊張を隠せぬオイスカ・チーム

上／プロジェクトを具体化する作業は仙台市内のスナックでも開店前の昼間に行われた（2011年7月25日）

中／地元での説明会。意見はなかなかまとまらなかったが……（2011年9月6日）

下／9月30日の「とんちゃん」で挨拶する地元の代表。20人以上が参加した

の面々に何度も酒が注がれた。ホルモン焼きの宴会は地元で「とんちゃん」と呼ばれ、農村地区では播種や収穫など仕事の節目ごとによく催していた。だから特別なことではないのだが、招かれたオイスカにとっては特別な日になった。体育館の避難所から仮設住宅に移った被災者を追うように続けられたオイスカの働きかけが実ったのである。シンポへの招待もその一環だし、6月には太田東大名誉教授が仮設に出向いて海岸林再生の大切さを訴える講演をした。

ヤマ場は9月6日の仮設集会所での話し合いだった。それまでに、「10年で名取の海岸100ha（農村では「100町歩」の方が通りがいい）に50万本の苗木を植える。苗木生産は地元被災農家が仕事として担い、10億円の費用は全額寄付で賄う」という分かりやすいプロジェクトの概要がまとまっていた。さて、乗るかどうか。

やる気の人もいた。「農業をしていると、子育てと同じで、こちらが植物に育てられていると思うことがある。苗木づくりに打ち込めば、同じ感覚が得られるのではないか」と森さんは思ったという。一方でなお不信感があった。会場では相変わらずビデオが回り、「うまいこと言ってまだ立ち直れない被災者をもう一度被災者にするつもりか」といわんばかりの、賃金などをめぐる厳しい質問が飛んできた。そこまでなくても「100町歩は大きすぎて手に負えん」「がれきの片づけやっても稼げる」という意見もあった。

北釜の何人かを除くと、大勢は否定的になっていく。席を立つ人もあった。集会所は静まり返る。と、すっと立ち上がった人がいる。「いいことやるんだろ。だったら俺はやるよ」

海から2・5キロほど内陸に入った杉ケ袋北地区で農業を営んでいた大友英雄さんである。地区の町内会の副会長だった大友さんは、小中学校の同級生だった北釜の高梨仁さんに声をかけられて町内会長とともに会合に出た。それまでプロジェクト自体を知らず、会合での発言もこれが初めてだった。

子どものころから松林に愛着を持ち、潮風や砂を防ぐその役割も実感していた。「あのままじゃあ、話が立ち消えになりそうだったしね」と大友さんは当時を振り返る。町内会長は結局乗らなかったから、参加者の多くが納得したわけではない。しかし、大友発言で会合の雰囲気はがらり変わった。

「すげえな」。オイスカの側がむしろ驚いた。大友さんはその後あちこちの知人に声をかけ、マツの苗づくりを担う被災者が北釜出身者にとどまらず広がりをみせる立役者になった。

種苗生産事業者講習会の修了証を手にした名取市民とオイスカの担当者。前列左が高梨仁さん。後列右から3人目が大友英雄さん。4人目が森清さん（2011年11月28日）

☆次回は12月号に引き続き2011年後半のプロジェクトについて書く予定です。

ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC™ C016564
www.fsc.org

公益財団法人
オイスカ
〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
TEL(03)3322-5161 FAX(03)3324-7111
E-mail：kaiganrin@oisca.org
■海岸林再生プロジェクト ホームページ
http://www.oisca.org/kaiganrin/
ブログは毎日更新中！ オイスカ 海岸林 検索

プロジェクトへのご支援・ご協力お願いします！

■郵便局から（お名前・ご住所・電話番号などを払込取扱票に明記してください）
口座記号・番号…… 00100-6-482316
加入者名…… 海岸林再生募金
■銀行から（お名前・ご住所・電話番号などは別途下記にお知らせください）
銀行名…… 三菱UFJ銀行　永福町支店（支店番号347）
口　座…… 普通　0054080
名　義…… 公益財団法人オイスカ（コウエキザイダンホウジンオイスカ）